新田集落の地域的構造

——武蔵野新田の一事例について——

矢 嶋 仁 吉

1. 緒 言

新田集落の地理学的研究は最近頃になり全国各地の事例に基づいて精緻な実証的研究の成果が公けにされているが、夫等の多くは新田開発の史的考察、新田集落の立地条件の検討及び集落景観の分析等を主とするものが多く、特に水田地域に於ける新田と水利との関係或は割替制度の特質等が問題とされている。我が国に於ける旧藩時代の耕地拡張の中核をなす新田開発は農業技術の改良や各種の土木事業の発達に伴つて行われたが、その主たる事業は開田であつた。それ故、従来の新田研究の対象としてはかかる水田地域が多く選ばれ、それらの学界に寄与した点は決して少ない。併し一方に於ては、多年の間荒蕪地や林野のまゝに放置されていた扇状地や洪積台地の開発によつて陸田の増加を図つた事も著しく、特に享保年間の武蔵野新田の開墾、貞享年間の上野笠懸野（大間々扇状地）の開拓等はその最も著しい例といえよう。

本稿はかかる陸田の開発地域としての武蔵野新田の1事例について集落立地の農業経済的基盤としての土地所有形態の分析を試みたものである。勿論かかる1小地域の例を以て一般的な傾向を推量したり、普遍性を求める事はできないが、斯様の例によつても近世に於ける新田集落の規模とその生活の基盤をなす土地利用の地域的構造の一斑を推し得るかと思う。

2. 研究地域と問題の所在

本稿に述べる研究地域は武蔵野台地の西西部の略々中央に近く、狭山丘陵の東南約6 軒に位置する大沼田新田である。本新田の開発過程や集落立地の自然地理的条件及び集落景観の特質等に就いては、既報の小論⁽¹⁾に於て述べたので本稿に於ては重複する説明は可及的に避けて専ら土地所有形態を中心としてその地域的構造を明らかにしたい。一般に新田開発地域に於ては多くの場合その初期の段階に於ては古村に依存する所があり、生活資材は勿論、一切の生産資材に就いても古村への依存度が著しい事は

一般的傾向と考えられるし、又、かゝる事例に接する事が多いのであるが、新田集落の成立以後は、かゝる事は出来るだけ避けて自給自足の態勢を営むようになる。開拓初期に於ける畝下年季も3～5年であつてそれ以後は所によつては若干年間は半免その他の特典があつたが、その開発を終つて検地を受くる事によつて石高が確認されるものであり、これが貢租の基礎をなすとともに、独立した村落共同体としての性格を具備するものとなる。しかし、元来地味の低い荒野を開拓した所で急速に十分なる生活資財を得る事は困難であつたであらう事は容易に推察される。殊に同じ武蔵野台地の新田でも三富新田⁽²⁾の如く各戸平均約5町歩の耕地を保有し、しかも開発事業に関して藩の支持の厚い所と、本地域の如く極めて小規模の民営新田の場合とでは大きな差異が見られる。徳川中期以後、全国に拓かれた新田には、必ずしも之れと軌を一にするもののみとは限らないであらうが、土地所有の形態に他の自然村落に見られない地域的特性の存在する事が推定される。そこで、私はかゝる新田に於て開拓以後、耕地や戸口が如何に変化して行つたか。各戸の保有する耕地の面積とその配分状態は如何に行われたか。新田開発に於ける指導層と一般入植者との土地所有關係上に於ける差異はどうであつたか。等の諸点に問題を求めて本地域に就いて精査した所に基つて論述を進めようと思う。

3. 大沼田新田に於ける耕地及び戸口の變遷

大沼田新田は既報の如く、武蔵野台地の台地面に開拓された所謂「武蔵野新田」の一であつて、享保初期に開拓の起源を有し民営新田として成立した新田集落である。本地域の耕地及び戸口の変遷に関する資料は、元文元年以降の検地帳、高反別名寄帳、村方明細帳その他の古記録によつた。是等の諸資料によると、開拓年代は享保6年(1721)であつて、武蔵野台地に於ける新田開発史上、最も活潑な事業の促進された時代に開拓された新田である。始めて検地の行われたのは元文元年(1736)であつて、入植後約25年を経たからの事である。元文元年の「武蔵国多摩郡大沼田村新田検地帳」に拠ると、当時の戸数は33戸であつたが、露後次第に戸口の増加を見て、元文4年39戸、嘉永5年45戸、慶応2年50戸となつた。耕地に就いては元文元年の検地當時に於て窓客123町9反5畝3歩をそのまま維持しているが、田畑の利用度は可成り変化し、特に水田の開かれた事が著しい。村全体としての耕地面積及び屋敷面積を、元文元年と慶応2年とに於て比較すると第1表の如くである。

これによつて明らかのように保有耕地の内、最も
 広大な面積を占めるのは、野畑で下々畑之れに次ぎ、
 林畑も可成りの面積を占めている。元文元年の検地
 の際は、下々畑、野畑及び林畑を併せて、全村の
 92.4%に達し、慶応2年に於てもそのパーセンテー
 ジは91%で保有地の大部分は、品等の低い下々畑に
 よつて占められている。武蔵野新田の内、水田のあ
 る事は特筆すべき所であるがその面積は、全面積の
 0.3%から1.8%になつたに過ぎず、しかもその所有
 者は少数のものに限定されている事実が見られる。

野畑及び林畑に就いては、既報の小論に於ても引
 用した如く、地方凡例録巻二に、

「野畠モ山畠同然、野方原地等ノ悪地ノ所ヲ野畠ト
 云名目ニテ高請シタル畑也」

とあり、又、林畑に就いては

「林畑ハ高受致シ、雑木等仕立、薪ニ伐出ス畠ヲ云、
 山畑同然、下々畠ノ位モ附難ク林畠ト申名目ニテ
 石盛取箇モ低クツケル。尤林畑ニハ下畑下々ナド
 ノ位ツケタルモアリ、不限山中、野方ニモ里方ニ
 モ地広成畑ニアリ。野方ニモ上州勢多郡辺、武州
 川越領、野火止領ナド所々アリ。野方ノ悪地也。」

とあり、又、新編武蔵風土記第77、秩父郡下名栗村
 の条に

「切畑林畑ナト云ルハ最モ下畑ニテ貢賦ノ制モ至ラ
 卑ク木立山トナセリ」

とあるのより見ても地味の極めて低い土地であるこ
 とが推察される。尙、武蔵野に於ける林畑に就いて
 は、内田寛一先生は、武州豊島郡下板橋村の検地帳
 によつてその所在を示され、「林畑は林の一部を切開
 いて耕地に利用する所、切畑は同じく森林を切開い

第1表 大沼田新田の地目別面積の變化 (1736~1866)

年度	土地	屋敷	下田	中ノ下畑	下畑	下々畑	野畑	林畑	合計
元文元年 (1736)	町反畝歩 1. 5. 1. 6.	町反畝歩 3. 4. 3.	町反畝歩 2. 1. 2. 12.	町反畝歩 5. 1. 0. 12.	町反畝歩 45. 7. 6. 21.	町反畝歩 50. 8. 4. 15. 13.	町反畝歩 2. 5. 24. 123. 9. 5. 3.	町反畝歩 100 %	町反畝歩 100 %
慶応2年 (1866)	町反畝歩 1. 7. 8. 27.	町反畝歩 2. 2. 4. 24.	町反畝歩 1. 9. 0. 9.	町反畝歩 5. 3. 6. 19.	町反畝歩 43. 8. 7. 4.	町反畝歩 50. 2. 0. 19.	町反畝歩 18. 5. 6. 21.	町反畝歩 100 %	町反畝歩 100 %
総反別に対する%	1.3 %	0.3 %	1.8 %	4.2 %	36.9 %	41.1 %	14.4 %	14.6 %	100 %

て耕地に利用する所で、焼畑と同様に3年又は5年の後伐つた木の株から出た芽が繁つてくると畑には利用しないで森林として了う処である。」と述べられ、之れを切替畑という所もあるとされて居られる。即ち林畑は普通の畑としては最下等のものと考えられる。⁽⁶⁾青鹿四郎氏も「林畑は前記林地切替畑、切畑は原野切替の方式に近いようにも考えられる。」とされている。斯くの如く林畑は耕地としての価値は少いが此の時代に於ける農家の肥料、燃料の供給源としては重要な意義をもつていたものである。即ち当時、田畑の地力の維持及び促進の源としての肥料は専ら草木葉、厩肥、堆肥及び尿等を主としたものであり、秣場や林野の存在は農業経営上必須の条件であつた。各地に新田の開墾されるに伴つて秣場が減少したが、一定の面積を確保する必要があり、かゝる意味からいつても林畑の存在は看過し得ない。野畑もまた林畑と同様に原野を切り拓いて耕地として利用した所で品等の極めて低い所である。これによれば、野畑及び林畑といえる畑地は、火山の裾野や洪積台地などの最も地味の瘠せた土地を指すのであつて、かゝる地域は生産力の極めて微々たる所である。

之れを石盛より見ても、下田7), 中ノ下畑5), 下畑1), 下々畑3), 林畑2), 野畑2)となつて居り、地力の著しく微弱である事を物語っている。本地域では畑地としては最も品等の高い所でも、中ノ下畑であり、しかもその面積は全体の1.5%に過ぎず、之れを保有するものは全戸の $\frac{1}{3}$ 以下である。水田は、元文元年検地の際は総反別3反4畝3歩であつたのが、慶応2年には2町1反4畝24歩となり、他に比して著しい増反を示しているが、全戸に対して水田保有者は、中ノ下畑と同じく $\frac{1}{3}$ に達しない。大部分の村民は下畑以下の畑地の耕作を以て生計を維持したのである。各地目別の増減状況は第1表に示す通りである。

水田の増反の契機となつたのは、玉川上水の分水たる大沼田分水の開鑿により飲料の残水を引いて田用水として利用し、開田したものである。大沼田分水の開鑿は、開拓後30年を経た宝暦年中に行われたものであつて、畑より田への転化も、その後に行われ、とくに天保度に於ける増反が顕著である。村全体の耕地面積より見れば僅かに1.8%に過ぎないが、乏水性の台地面に於ける開田として特に注目される所である。

4. 各戸の土地所有關係と經營規模

次にこの新田に於ける各戸の土地所有關係に就いて見よう。資料は、慶応2年の「武蔵国多摩郡大沼田新田高反別名寄帳」に拠つた。この記録によつて各戸の保持す

第2表 大沼田新田の土地所有形態 (慶応2年調) (欠嶋)

番号	所	有者	屋敷	下田	中ノ下田	下畑	下々畑	野畑	林畑	合計
1	文左衛門	反	3. 6	反	6. 3	反	1. 4. 18	1. 4. 9	1. 4. 0. 24	1. 7. 4. 18
2	金兵衛	2. 4. 27				5. 6. 15	9. 7. 5. 20	7. 6. 1. 6	1. 7. 6. 21	20. 9. 5. 2
3	彌左衛門	2. 0. 18		4. 2.	3	3. 0	9. 6. 0	3. 2. 0. 18	3. 9. 4. 4. 0. 3	
4	周藏	1. 9		4. 0	1. 1. 27	9. 0	1. 0. 0	7. 5. 24		1. 0. 5. 15
5	利兵衛	3. 0			7. 21		3. 4. 0	5. 9. 21		9. 8. 3
6	留五郎	4. 12					1. 1. 8. 27	3. 0. 9	5. 9. 1. 5. 8. 12	
7	金右衛門	3. 27						8. 6	6. 21	9. 5. 18
8	彦兵衛	15						2. 2. 3		1. 3. 3. 9
9	米次	—				3. 0. 3	6. 6. 24	5. 0. 18		1. 1. 7. 21
10	喜助	2. 0				6. 15	3. 2. 3	7. 7. 3		3. 1. 0
11	右衛門	2. 2. 24					3. 9. 15	7. 0. 0	3. 1. 0	1. 4. 3. 9
12	左衛門	5. 6				2. 5. 6	5. 2. 6		1. 8. 9	1. 0. 0. 27
13	伊左衛門	2. 21			9. 27	1. 0. 12	5. 7. 9	3. 2. 15	5. 2. 3	1. 6. 4. 27
14	権兵衛	1. 3. 18				1. 7. 12	6. 7. 21	4. 2. 3	1. 4. 0. 24	
15	源四郎	—			7. 24			7. 7. 27		8. 5. 21
16	慶助	3. 24					5. 3. 12	8. 9. 24		1. 4. 7. 0
17	太郎	1. 15		3. 8. 15	7. 9	6. 9	1. 4. 0. 21	3. 6. 12	1. 6. 7. 3	6. 9. 7. 24
18	善兵衛	1. 27				1. 1. 0	1. 3. 0. 27	7. 9. 0		2. 2. 2. 24
19	伊八	7. 3				1. 0. 18	5. 1. 0	1. 5. 8. 6	2. 0. 9	2. 4. 7. 6
20	右衛門	2. 0					6. 2. 15	7. 1. 15	2. 0. 0	1. 5. 6. 0
21	与三	5. 21				7. 9	8. 4. 27	8. 6. 18		1. 8. 4. 15
22	右衛門	2. 15				3. 4. 15	6. 1. 18			9. 8. 18
23	佐兵衛	5. 3		8. 0		1. 3. 21	1. 4. 1. 18	5. 9. 24		2. 2. 8. 6
24	広兵衛	2. 12		2. 8. 0	3. 12	5. 1. 27	1. 5. 2. 0	7. 9. 8	4. 21. 3. 2. 1. 20	
25	伝吉衛									

26	勝右衛門	4.	0	1.	2.	0			1.	0.	0	5.	0.	0	3.	9.	21	1.	9.	3	1.	3.	4.	24	
27	七郎左衛門	3.	21	1.	7.	24	1.	3.	15	1.	5.	21	7.	6.	6	1.	7.	18	1.	7.	0.	3	4.	18	
28	兵助	2.	12					4.	3	1.	0.	6	2.	7.	3	2.	2.	15				6.	6.	9	
29	太郎右衛門	2.	12	1.	3.	15				1.	0.	9	8.	3.	21	1.	8.	6.	4		3.	0.	1.	1	
30	磯右衛門	3.	3		8.	0				1.	7.	6	2.	0.	9.	6	1.	9.	2.	15	6.	5.	15	4.	
31	む右衛門	5.	0							8.	8.	0	2.	0.	21					6.	5.	15	1.	7.	
32	佐右衛門	6.	0							2.	9.	21	8.	4.	24				9.	0.	21	2.	1.	1.	
33	七兵衛	6.	12							1.	3.	15	2.	9.	27				6.	3.	27	1.	1.	3.	
34	庄左衛門	6.	18		3.	15	6.	6					1.	4.	6.	15	2.	6.	2.	9	1.	1.	0	5.	
35	幸七	3.	27	3.	3.	15							1.	8.	3.	27	1.	5.	8.	12	4.	5.	0	4.	
36	徳兵衛	1.	15														2.	4.	18				2.	6.	
37	平右衛門	6.	6		3.	15	1.	4.	6				1.	5.	5.	12	1.	8.	4			1.	9.	7.	
38	直藏	2.	0							6.	21		7.	2.	3	1.	3.	7.	27	1.	5.	7.	15	3.	
39	泉太	—			2.	6				3.	18		8.	2.	0	2.	1.	2.	6	1.	5.	2.	18	4.	
40	金次郎	8.	0		4.	15				7.	9		7.	6.	6	1.	3.	9.	3			2.	3.	5.	
41	佐右衛門	1.	6										1.	8.	6	3.	7.	15				5.	6.	27	
42	長左衛門	2.	0							6.	9					1.	4.	5.	9	2.	5.	18	1.	7.	
43	平吉	—											2.	6.	11	4.	7.	12		1.	3.	9	8.	7.	
44	勤右衛門	1.	15		5.	15	1.	1.	3				4.	1.	24	8.	27					6.	8.	24	
45	右衛門	1.	21										6.	9.	18	8.	5.	21		3.	3.	9	1.	5.	
46	兵衛	2.	0							4.	6.	0	3.	7.	21	6.	0.	24					8.	1.	
47	孫兵衛	1.	6							9.	7.	12	9.	7.	12	1.	1.	0.	21	9.	0.	24	3.	0.	
48	徳左衛門	2.	3										9.	2.	3	3.	6.	21		4.	0	1.	6.	5.	
49	八兵衛	3.	27							1.	0.	4	9.	2.	9	2.	9.	9	1.	0.	2.	15	1.	3.	
50	七郎右衛門	—											2.	9.	9	50	2	0	19	町反敵歩	町反敵歩	町反敵歩	町反敵歩	町反敵歩	
合		町反敵歩	1	7	2	2	4	24	1	9	0	9	町反敵歩	5	3	6	19	43	8	7	4	50	2	0	19
計		町反敵歩	27	2	2	2	2	24	1	9	0	9	町反敵歩	5	3	6	19	43	8	7	4	50	2	0	19
合		町反敵歩	27	2	2	2	2	24	1	9	0	9	町反敵歩	5	3	6	19	43	8	7	4	50	2	0	19
計		町反敵歩	27	2	2	2	2	24	1	9	0	9	町反敵歩	5	3	6	19	43	8	7	4	50	2	0	19

る屋敷及び耕地を地目別に表示すると第2表の如くなる。先づ保有する各戸の総反別に就いてみると、第3表の如くになり、1戸当り平均所有土地の面積は2町4反7畝27歩となる。併し乍ら実際はこの中に全面積の17%に当る土地を保有する大地主があるので、之を除外すると各戸平均所有土地は約2町1畝歩となる。

第3表 大沼田新田の土地配分 (1866)

	5反以下	反町 5~1	町町 1~2	町町 2~3	町町 3~4	町町 4~5	5町以上
戸数	3戸	9戸	20戸	5戸	4戸	6戸	3戸
全戸数に対する%	6%	18%	40%	10%	8%	12%	6%

第3表に示す如く最大多数を占めるのは1町歩より2町歩迄の土地保有で全体の戸数の40%を占めている事である。かゝる土地保有の分化は、新町、砂川新田、及び小平町に属するその他の諸新田などの民営新田に於ても見られるものである。この耕地保有形態は、決して均田主義に基づくものとはいえないが、唯1人の名主が20町歩余の耕地を占有する以外は、他の入植者は、特等大きい規模の耕地を保有するものではなく、略々平均した自営農民によつて村落が構成されていた事を物語るものといえよう。併し慶応度の名寄帳によると1戸当り5反以下の百姓も僅か乍ら存在する。これは皆後代の分家及び新入植者であつて寧ろ自作兼小作者としての存在である。概ね畑を主たる耕作地としていたので如何なる農業経営が行われたか。これに就いて土地利用又は支配的な生産様式を類推し得る資料は乏しいが、村方明細帳によれば畑作物として、大麦、小麦、粟、稗、陸稻、蕎麦、芋及び若干の野菜を主としたものであり、所謂「農間渡世」として見るべきものは殆んどなく専ら耕作を事としたのである。土地の生産力の低位性を補填して農民生活の安定を図るための一方策として実施されたものに粟の木の栽培があつた。宝暦10年辰8月の「武蔵野御栗林御用留帳」(小金井村郷土誌所収)によれば、小金井新田を中心として近傍一帯の新田に於て毎年幕府に上納の粟をつくと共に、その剰余は之れを江戸に売出して生計の助けとしたのである。この粟の収入は、幕府献上の剰余とはいへ、上納分はむしろその一部に過ぎず、その大部分は農民の生活に資したのであつて、大沼田新田も亦その恩恵に浴した。

前掲の記録に、

「武蔵野新田御林御栗実御献相済残栗例年之通、村々江被下置難有頂戴仕候、出百姓江銘々割渡可申候」

として近傍39ヶ新田への配分数量を示してあるが、これは一方には新田の農民に対する幕府の助成策であつた。これを以て、既にこの地域に於ける農業生産品の一部は江戸を中心として商品化の傾向を示すものと推定される。即ち、江戸に対する近郊的農業経営の萌芽はこのようにして進展し、他の農業経営も反映するに至つたものと考えられる。併し、その他に限られた耕地を極度に利用して生産力の確保を図るために、屋敷面積を限定した事が注目される。これは、既報の小論に於て詳説したが同じ新田でも砂川新田の如く早くより開拓され、しかも比較的地味のよい所では屋敷面積も大であるが、大沼田新田の場合は第2表でも知られるように、屋敷面積は極めて少い。3〜7畝歩のものが大部分を占めて居り各屋敷は之れを「家下庭構」と「雑事畑」とに分ち、その石盛を前者を9、後者を7としてあるのが注目される。一般に屋敷の石盛は上畑又は中畑に準して行われるのが普通のものであるが、本地域に於ても屋敷の石盛の高い事が認められる。耕地の品等の低い所のため出来るだけ広い面積を確保する必要と、屋敷の面積を少くとつて貢租を低額にしようとする表われと考えられる。第2表に屋敷面積の記載されないものは寺（泉蔵院）の外4筆あるが、之れに就いては確かな記載はないが（50）の七郎右衛門のみは、隣村の柳久保村に居住して入耕作をしている事が明記してある。その他のものは、何れも1町歩以下の小農のみである。

尚、本地域に於ける屋敷の規模及び土地割の分析及びその形態上の特質等に就いては、既報の小論を参照して頂ければ幸甚である。

5. 結 言

以上極めて管見的な考案であるが、武蔵野台地における1新田集落を例にとつて、近世の新田の土地所有形態に就いて考察した。云う迄もなく、農業経営の規模や土地利用の特質はこの外、生産活動や農業技術の問題及び農村における人口構成その他労働過程の立体的な面の総合的考察を通して始めて行わべき課題であるが、茲に於ては、唯僅かに土地所有の分化の形態の面のみより述べて、新田集落研究の一つの資料を提示したものに過ぎない。村落居住様式の検討と共に他日を期して先学諸賢の御批評を仰ぐ次第である。

- 〔註〕(1) 拙稿、武蔵野新田集落の研究（第3報）地理教育、昭和12年11.12月。
(2) 三富史蹟保存會、三富開拓誌 昭和4年。
(3) 大石久敬、地方凡例錄 卷2（日本經濟叢書）
(4) 新編武蔵野風土記稿 77
(5) 内田寛一、經濟地域に關する諸問題の研究 昭和9年
(6) 青鹿四郎、農業經濟地理 昭和10年

comparing the landoutput per village in Kii-zoku-Hudoki with that in Keichyo-Kenchi-cho, viz. the records of landoutput in 1613. Since the compilation of Kii-zoku-Hudoki was completed in 1839, the comparison of those two records means the comparison of the early period of Edo Age with the late period. Because almost all villages in Kii-zoku-Hudoki which are not found in Keichyo-Kenchi-cho, had already established by the middle period of Edo Age, I presume that the comparison of those two records really means the comparison of the early period with the middle. Of course, the landoutput might have increased after the middle period, but I think it was not so rapid it is highly probable that it tended to stagnation.

The fact that new reclamation of fields are not found in this region after the middle period with the some exceptions means that there were no historical and geographical possibilities for the reclamation and that this region which belongs to the Kinki-region had already been reclaimed and populated from former times.

ON THE REGIONAL STRUCTURE OF A "SHINDEN" (RECLAIMED FIELDS)

NIKICHI YAJIMA

This is a study concerning Onumata-shinden situated nearly in the central part of the plateau of Musashino, and describes the changes of both the number of houses and the area of the cultivated land, which are two of the fundamentals to the formation of a village, and also states the allotment of the cultivated land. Onumata-shinden is a settlement brought under cultivation in 1721, the 6th of Kyoho.

This study based mainly of the old records preserved in the village may be summarized as follows:

- (1) Onumata-shinden is a settlement reclaimed in the latter period of

the Tokugawa era.

- (2) About twenty-five years after the reclamation, a surveying of land was made, and since then the settlement has developed as an independent village.
- (3) A plot of land covering an area of from one to two cho has been allotted almost invariably to every house-holder. The only exception to this is the case of a land-owner who had owned a tract of cultivated land amounting to twenty cho.
Since the reclamation days, the master of this house had always been the headman of the village (nanushi).
- (4) The cultivation land is for the most part sown to barley, wheat, etc., but about 1.8 of it are paddy-fields.
- (5) The cultivated land is generally barren, and from this may be inferred the poverty of the livelihood of the villagers.

A HISTORICAL AND GEOGRAPHICAL EXAMINATION OF IZUMIO-SHINDEN OF SETTU

—As a Part of Studies of the Settsu-Type Agriculture—

TOKIO MITSUHASHI

Izumio-Shinden is taken up as an area where the so-called Settsu type agricultural management was carried on, and an attempt is made to clarify the foundation on which such an agricultural management was realized.

Firstly, the development of Shinden is briefly touched upon, and its character as Shinden contracted by tradesmen is indicated. Next, mention is made of the allotment of land and of the tillers. The information is based on "Shinden jiwari-cho" (A Book of Allotment of Shinden Land) and "Gesaku Nayose-cho" (A Directory of Tillers) compiled in the initial stage of the development of Shinden.

Thirdly, how a tiller and land were combined is explained, and lastly